

幼児の歌唱指導についての一考察  
- “大きい声の弊害” という観点から考える -

千田 耕太郎  
四條畷学園短期大学

A Study on Singing Guidance for Young Children  
- Think from the Viewpoint of “Harmful Effects of Loud Voice” -

Kotaro Senda  
Shijonawate Gakuen Junior College



幼児の歌唱指導についての一考察  
－ “大きい声の弊害” という観点から考える －

千田 耕太郎\*

A Study on Singing Guidance for Young Children  
- Think from the Viewpoint of “Harmful Effects of Loud Voice” -

Kotaro Senda

保育・幼児教育現場を訪問する際、幼児が“大きい声”で歌唱している場面に出会うことが多々あり、そのことが幼児の歌唱に悪影響を及ぼしているのではないかと考えるに至った。本稿では、“大きい声の弊害”という観点から、保育・幼児教育における歌唱指導の問題点を探り、声帯への悪影響、歌唱技術面での悪影響、歌唱表現面での悪影響の3つの視点から考察した。次に、“大きい声”の歌唱指導がなかなか改善されない理由について説明を試みた。そして、その解決例として本学音楽研究室の実践を示し、その有効性を確かめた。

**Key words:** 幼児 歌唱指導 発声 大きい声

はじめに

ある幼稚園を訪問した際、メロディーの高低がほとんど無い大声で歌っている歌唱指導の場面に出会ったことがある。「もっと大きい声で!」「もっと元気よく!」という先生の声掛けに応じて、子どもたちは“喉に力を入れて”一所懸命叫ぶように歌っているのだが、その小さく未熟な声帯を痛めてしまうのではないかと心配してしまうほどであった。もちろんこれは一つの例であり、全ての園にあてはまるわけではないのだが、保育所や幼稚園を訪問する際、程度の差こそあれ“大きい声”の歌唱指導の場面に出会うことがしばしばあり、保育・幼児教育現場での歌唱指導について、これで良いのだろうか?と疑問を感じるようになった。

一方、本学園の幼稚園では、30数年前から本学音楽研究室の教員が歌唱指導を行ってきており、園児たちは音程感のある優しく柔らかい声で表情豊かに歌っている。

本稿では“大きい声の弊害”という観点から、

保育・幼児教育における歌唱指導の問題点を探り、その改善例として本学音楽研究室の実践を示し、幼児の歌声のあるべき姿を探る。

ここで述べておきたいのだが、本稿で使用する“大きい声”という表現について、その言葉から受けるイメージや意味合いは人それぞれ違っているかもしれない。そこで本論に入る前に、“大きい声”の意味するところについて筆者の考えを述べ、共通認識としておく必要があると考える。

まず、本稿ではあえて使用しているのだが、“大きい”“小さい”という言葉は、音楽における音色や表現を表すのに相応しい言葉ではないと考えているのである。

私達が音楽において音や声を言葉で表す時、使われる言葉は沢山あるが、“優しい”“激しい”、“明るい”“暗い”、“硬い”“まろやかな”等、どれも音や声の音色を表しているのである。では、“大きい”“小さい”はどうだろう。“大きい”“小さい”はどちらも音や声の量を表す言葉であり、音色を表すニュアンスはほとんど感じられない。音楽記号にフォルテ、ピアノという記号があるが、フォルテは、“力強く”感じられる音色で表現すること

\* 四條畷学園短期大学 保育学科

が大切なのであって、結果として音量が大きくななくてもよいのである。同じように、ピアノは“弱く”感じられる音色で表現することによって、ただ単に音量を小さくすることではないのである。ささやくような内面に力を秘めた“フォルテ”や、豊かに響く“ピアノ”があってもおかしくないのである。音量よりも音色が大切なことについて大蔵(1998)は、次のように述べている。

かって、著名な指揮者であるストコフスキーが、「ppp = 20 フォン、pp = 40 フォン、p = 55 フォン、mf = 65 フォン、f = 75 フォン、ff = 85 フォン、fff = 95 フォンにしよう」と、音楽演奏における音量の定量化を提唱したことがあったが、受け入れられなかったことがある。これは当然のことである。音楽上のダイナミックは音量も確かにその一要素ではあるが、最も大きな要素はその音色であり、音色に含まれる力強さや柔らかさがフォルテ(f)やピアノ(P)という音楽上のイメージとなるのである。勇壮なフォルテの音楽をいくらアンプのボリュームを下げて聴いてもフォルテの音楽のイメージは消えないし、柔らかいピアノの音楽をいくらボリュームを上げて聴いたにしても相変わらずピアノの音楽のイメージは続くのである。<sup>1)</sup>

そのようなことから、音楽における音や表現を語る上では音色こそが大切な要素なのであり、物理的な音の量を表す“大きい”“小さい”という言葉を使用することは適当ではないと考えるのである。

そして、“大きい声”という表現の中には、“どなり声”や“さげび声”のような“大きすぎる声”という意味ももちろん含まれるのだが、それに加え、保育・幼児教育現場では、より“大きい声”を求める傾向、つまり音色よりも音量を求める傾向が強いように感じており、そのことから本稿ではあえてマイナスのニュアンスを込めて“大きい声”という表現を使用しているのである。そして、“大きい声”を求める傾向が幼児の歌唱技術においても歌唱表現においても弊害を招く要因となっていると推察するのである。

## 1. 幼児の歌唱指導における問題

では、保育・幼児教育現場での歌唱指導におい

て“大きい声”で歌うことにどんな問題があるのか、筆者が以前に本学幼稚園で歌の指導を行った経験や、本学小学校で音楽専科教諭として教鞭をとっていた経験、本学園音楽教室での指導経験を踏まえて、声帯への悪影響、歌唱技術面での悪影響、歌唱表現面での悪影響の3つの視点から問題点を探っていく。

### 1-1. 声帯への悪影響

幼児の歌唱指導についての先行研究は多数あり、その多くが怒鳴り声や大声が幼児の声帯へ及ぼす悪影響について言及している。例えば、小木曾(1986)は、どなったりすると、強い呼気圧で声帯が腫れ、さらに進むと突起物となり声門が閉じずに声がかれ、それが進行してポリープや結節となる危険があると述べている<sup>2)</sup>。颯田(1976)は、日本が幼少年の音声について無関心であり、金切り声を出して叫んでも全く気にせず、繊細な喉頭がめちゃめちゃだと述べている<sup>3)</sup>。大森(2011)は、「幼少期における慢性的な「どなり声」は、いまだ柔らかい幼児の声帯を傷める恐れがあり、決して好ましいこととは言えないものがある。」<sup>4)</sup>と述べている。

そのようなことから、“大きすぎる声”が幼児の声帯を痛めてしまう恐れがあることは明らかである。ひどく傷ついた声帯は二度とは元に戻らない。子どもたちの健やかな成長の重要な部分を担っている保育・幼児教育の現場で健康面での弊害があってはならない。私たち保育者養成校の教員も含め、幼児、児童の教育に関わるものはそのことを肝に銘ずるべきである。子どもたちの未来に広がっているであろう、素晴らしい音楽経験の芽を摘んでしまうことにもなりかねない。

### 1-2. 歌唱技術面での悪影響

次に、“大きい声”で歌うことを、発声の視点から考えてみる。

人間の声には、喉頭の筋肉や声帯の働き方の違いにより区分される声区という声の区域がある。声区には、いくつかの説があるのだが、ここでは声を出して一番実感しやすい二つの声区について、ごくおおまかに述べる。

ドレミファソ…と「あ」の母音で音階を歌って

いくと高い音が出しづらくなっていく。それでも音階が上がっていくと、ある音高で声がひっくり返って響きの弱い声になる。裏返るまでの声を胸声や表声（その区域を胸声区）といい、裏返ってから上の声を頭声や裏声（その区域を頭声区）という。そして声区の変わり目を換声点という。

胸声は、甲状披裂筋等の声帯を構成する筋肉を緊張させ、声帯全体を振動させて発声するので、声量は豊かである。一方、頭声、裏声は、輪状甲状筋等の声帯を伸展させる筋肉を主に使い、声帯の先端部分のみを振動させて発声するので、声量は弱くなる。

優秀なオペラ歌手や、ジャズシンガー、ポップスの歌手などは、声の傾向の違いこそあれ、トレーニングされコントロールされた声を駆使し、複数の声区にまたがる幅広い音域の難曲を自由に歌うが、歌うことに慣れていない幼児はそうはいかない。無理なく声を出すこと、音高に合わせて声を出すことが出来てきたら、次の段階として表声から裏声に変わる喚声の感覚をつかむことがとても重要なのである。志民・中村(2010)は、「歌唱において、声域を広げたり、表現力の幅を広げたりするためには、裏声を用いること、そして裏声と表声を喚声する技能が必要不可欠となる。」<sup>5)</sup>と述べている。

実際の歌唱において音域の広い歌を歌う場合は、胸声区と頭声区の両方の声を使って歌うのだが、胸声区を頭声のような柔らかい響きで歌っていくと、音が高くなって頭声区に移行する場合も換声点が目立たなくなり頭声区の音域まで滑らかに無理なく歌うことが出来るようになるのである。

一方、“大きい声”で喉に力を入れて歌うと、ラ～ド辺りから苦しくなり声が出しづらくなる。(譜例1)



それでも無理をして高い音を出すと、“クレン”と声がひっくり返って響きの少ない裏声になる。そのような歌い方だと自分自身声ひっくり返るのを気持ち悪く不自然に感じて頭声区の音もますます喉に力を入れて無理やり胸声で叫ぶように歌ってしまうか、あるいは裏声の出し方が解らず、胸声で音高が上がらないまま歌ってしまうことになるのである。

ここからは筆者の小学校教諭時代の経験談であ

るが、小学校に入学したての何人もの児童が、“大きい声”で音程や音色など一切気にせず、だが、“とても楽しそうに”元気に歌っていた。その子等の歌う気持ちを大切にしたいと、あまり手を加えずにそのままにしていた。そのうち治せるだろうと甘く考えていたのである。学年が進んで3～4年生になり、歌の音域が広がり難度が上がってくると、徐々に自分の歌い方に限界を感じてくる。そこで、裏声に喚声する方法に気がつく者もいるが、ほとんどの場合、長年の“大きい声”の歌唱で喉に力を入れて歌う癖がついてしまい、なかなか修正できないのである。やがて他の“自由自在に歌える”児童との違いを意識するようになって、歌うのが消極的になってくる。また、音の高さや音程をあまり気にせずに来たので、音感が育ちにくく、歌唱以外の音楽活動でも支障をきたす場合があり、音楽活動に対し消極的になっていく。そして最悪の場合、歌嫌い、音楽嫌いになってしまう。

奥田(2014)も、小学校低学年を対象にした研究で筆者の経験と同じようなことを述べている。

「どなり声」による歌唱は、一見すると活気のある歌唱を引き出すには有効のように感じられるが、子どもの声帯を中心とした身体に負担を与えるものであるため、次第に歌うことに辛さを感じさせていくことになる。また、小学校中・高学年以降になると、「どなり声」のままでは、より高度になっていく歌唱活動がしにくいことに気付き、次第に歌唱に対する意欲を失っていくことにつながりやすい。これらの結果として、歌うことの嫌な子ども、ひいては音楽嫌いな子どもを生み出す結果を招来することにもなりかねないのである。<sup>9)</sup>

一度体が覚えてしまった発声の癖は改善することが難しく、直すのに時間がかかる場合が多い。生涯にわたって音楽に親しみ、歌うことを楽しむためにも、あえて“大きい声”で歌わず、出来るだけ早い時期に裏声への換声のテクニックを覚え、あらゆる歌に対応できるための発声の素地を作っておくことが大切だと考える。

### 1-3. 歌唱表現面での悪影響

音楽は、それを演奏したり聴いたりすることによって、心を動かしたり動かされたりすることが、大きな目的の一つである。心を動かす演奏には演奏者の表現する気持ちが込められ、それが音に反映されている。音楽を聞く者も自らの経験や体験と照らし合わせ、心で音楽を聴いている。そして、演奏者の表現する心と、それを聴く者の心が共鳴、共感したときに感動が生まれるのである。

幼児が歌を歌う場合も、自分の生活体験や経験を通して与えられた歌に共鳴、共感しているのであり、その気持ちを表現しようと試みることを繰り返し経験することによって、「豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」<sup>7)</sup>のである。したがって、優しい気持ちは優しい声で、うれしい気持ちはうれしい声で、悲しい気持ちは悲しい声で表現されるべきであり、「大きい声」の一点張りでは、豊かな感性や表現する力は養い難いし、創造性は豊かになり難いのである。

大森(2011)が、幼少期における慢性的な「どなり声」によって、幼児が音楽の持つ「美しさ」の本質を感じ取ることを妨げる場合さえ考えられる(8)と警鐘を鳴らしているが、全く同感である。「どなり声」や「大きい声」で歌うことは、表現する上で大切な音色が損なわれてしまうか、あるいは単調になってしまうので、幼児の表現する心が育ちにくいと考える。柔らかく自由にいろんな音色で歌える声を獲得することにより、表現することに意識が向き、自由な表現で歌うための道が開けるのである。言い方を変えると、大きく歌うことで声の音色が単調になり、注意深く自分の声の音色に注意を向けることが出来ないので、音色で表現する楽しさに気づけず表現に関心を持たないのである。

### 2. “大きい声”の歌唱指導が無くならない理由

これまで、幼児の歌唱における“大きい声の弊害”について考察してきたが、先行研究を調べてみると、30年以上前から「どなり声」や「大声」の弊害について提唱され続けてきたことが分かった。しかし最近になっても幼児の歌唱指導に問題を提起する研究はなくならず、保育・幼児教育現場で

は依然として同じような歌唱指導が繰り返されているように感じる。ではなぜ“大きい声”で歌うことが見直されないのか、次にその理由について考察する。

まずは、保育・教育現場における歌唱指導の実態調査についての先行研究を調べてみた。するとその中で興味深い研究がいくつか見つかった。武田(1980)は、歌唱指導の導入時のつまずきについて幼稚園教諭にアンケート調査を行っている。小木曾(1986)は保育士と幼稚園教諭を対象に「どなうたうことを中心に」うたう活動についての聞き取り調査を行っている。加藤(2014)は、「歌唱活動において問題に感じていること」について教員免許更新講習受講者を対象に調査を行っている。それら先行研究のデータを元に、筆者の経験を踏まえて考察してみる。

#### 2-1. 幼児が“大きい声”で歌ってしまう理由。

先行研究から、幼児が“大きい声”で歌ってしまうのにはそれなりの理由があることが見えてきた。

加藤(2014)のアンケートでは、保育者が考える幼児がどなって歌う理由として、「大きな声が良いと思っている」「大きい声になってしまうという意識がない」「大きい声に今の自分を精一杯表現する」「友達と声の大きさを競い合う」「ふざけて怒鳴る」などという結果が出ている。

小木曾(1986)の調査では、どなって歌う原因について、精神的な要因として「友達との競争心」「うれしい」「目だちたい」「調子づいている」「はしゃぐ」「先生の気をひきたい」「張り切っている」「イライラしている」などが、歌唱教材の要因として「高音域まである歌」「朝の歌 お帰りの歌」「好きな歌」などが、音楽的な要因として「慣れた曲」「曲にのっている」などが、発達段階の要因として「3才から4才前半まではどなる」などが結果として得られている。

筆者は経験から、子どもたちは本来常に前向きでやる気を持っていると感じている。上記要因の多くから子どもたちの積極的な気持ちが見て取れた。子どもたちはいつも一所懸命取り組んでいるのだ。ネガティブな要因も、そうさせてしまう悪しき経験を知らず知らずのうちに大人が積ませてしまったからではないだろうか。子どもたちの前

向きな気持ちを大事にしながら、“大きな声の弊害”を取り除いていく歌唱指導を行う必要があると強く感じた。

## 2-2. 指導者が“大きい声”で歌わせてしまう理由。

一方、教える側が“大きい声”で歌わせてしまう事にもそれなりの理由がうかがえた。

小木曾(1986)の分析によると、保育者の影響によるもののうちの83%が保育者の言葉がけによるもので、その言葉は、「元気よく」「大きな声で」「声が小さい」であった。そして、子どもの望ましい歌声とはどういうものかという問いに関しては、「元気よく」「元気な声」「大きな声」「小さくなく」「身体でうたう」などが上位を占めている。他にも、「気持ちが入っていれば、または、楽しんでうたっていれば、大きな声でうたったり、はずれてうたってもかまわない。」などがあった。この事から保育者が“大きい声”を良しとする傾向が強いことが見て取れた。

それから、武田(1980)のアンケートには次のような回答があった。「“元気に歌いましょう”と声かけしたら、どなり声になりなかなかおならなかった。」「強弱などおかまいなしに歌の指導をしたため、どんな歌でも大声になってしまった。」

加藤(2014)の調査の回答として、「優しくという声小さくなる」「『張り切る気持は大切にする、それが大声で歌うこととは別である』ということ伝えるのが難しい」「言い方しだいで間違った方向に進んでしまう」「年少児は言葉でのやり取りが上手く出来ない」などがあった。これらの例からは、歌唱指導において指導内容を言葉で伝える難しさがうかがえる。

そして、これらの研究資料と筆者の指導経験から得られた歌唱指導の反省点を元に、指導者が“大きい声”で歌わせてしまう理由を次のように推察した。

・子どもたちが一所懸命歌っていることの証として一番わかりやすい…“一所懸命歌う”=“大きい声”と考えてしまっている。

・忙しさのあまり教材研究が充分に出来ず、歌の表現に対して明確なイメージを持っていない…指導に関して言う事がないので、とりあえず「大きい

声で!」「しっかり!」と声掛けしてしまう。

・子どもたちをきれいな声に導く術がわからない…このままでは良くない。もっときれいな声で歌ってほしいと思っているが、ではどうすれば上手くいくのか、どう指導すればよいのか、具体的な方策が浮かばない。

・ピアノ伴奏を大きな音で乱暴に弾いている…ピアノ伴奏を表現に気をつけて心を込めて演奏すると子どもたちの声も変わってくる。これは自分ではなかなか気付かないのだが、知らず知らずのうちに教えようという気持ちがピアノに反映され、ピアノの演奏が荒く乱暴になってしまう。または、演奏技術や練習が不足している。

・先生の範唱が“大きい声”…教えようという気持ちが勝るあまり、表現する歌唱からかけ離れてしまう。範唱が上手に越したことはないのだが、思ったように歌えなくても心を込めて歌うと、案外子どもたちには通じるものである。

・先生の声掛けが大声…次の歌詞を前もって提示する声や、「もっとこう歌いましょう」と掛ける声大きいと→子どもたちも負けじと声が大きくなり→先生の声掛けももっと大きくなり→悪循環に陥る。

## 3. “大きい声の弊害”をなくし、歌声を改善するために

では、幼児の歌唱指導における“大きい声の弊害”をなくし、幼児の歌声を改善するにはどうすればよいか、その実践例として本学音楽研究室の取り組みの一例を示し、その有効性を確かめていく。

### 3-1. 本学音楽研究室の取り組み

本学音楽研究室は、学生への教育活動、演奏等の研究活動に加えて30数年にわたり、本学園併設の幼稚園で歌唱指導を行ってきたり、四條畷学園音楽教室を創設し、幼児や小学生に歌唱、合唱、ピアノ、ソルフェージュ、リトミック、器楽等の指導を行ってきたり、学生と共に着ぐるみ人形や大型紙芝居を製作し保育・教育現場や施設等を訪問、ボランティアで公演したりなど、幼児、児童と直接関わる教育活動を実践し、それを学生への教育活動にフィードバックし、成果を上げてきた。これらの活動は、本学元学科長で声楽家の東保が

考案し、淡路和子教授をはじめ音学研究室の教員が一丸となって実践してきたのだが、一研究室の活動としては他に例を見ない活動であるといえるのではないだろうか。

では、本学ではどのような歌声を目標に、どのように幼児に歌唱指導を行っているのか、次に具体例を挙げる。

### 3-2. 本学幼稚園や本学音楽教室での歌唱指導

本学では、はじめはあえてどの音域も弱く、細く歌うよう指導する。東(1984)は『音楽(音楽リズム)』の中で次のように述べている。

多くの人は、強い声、より強い声へとあこがれるが、強い声は次第に声帯を固くし、美しい音色を損ってしまう。反対に弱い声は、一見表現力をもたないように感じられるが、頭声へつながり、高音域が出しやすくなるばかりでなく、より機能のよい声へ広がっていく。そして、はじめは頼りなく感じていた声に響きも加わり、美しい音色に変化して幅広い表現力をもつようになる<sup>9)</sup>

そして、その理念に基づき私たちの研究室では幼稚園児や小学生に歌唱指導を実践している。

他の研究を見てみると、同じような理念を提唱している研究者は多い。品川(1958)は、児童は頭声発声であるべきとし、そのための弱声時期を重要視している。弱声で歌う努力によって、声帯と付属器官の調和的な使用法を自然に会得できると述べている。<sup>10)</sup> 武田(2002)は、幼児期の歌唱指導は、頭声的発声への導入として柔らかい声、優しい声、強声よりも弱声で歌う習慣をつけることが重要だと述べている。<sup>11)</sup>

具体的な発声法の一指導例として、「かえるの合唱」を使った移調唱”を例に挙げる。

- ・まず初めにへ長調で歌う。「お母さんがえるで歌いましょう。」とイメージを与え、決して強くなく優しく音程に気をつけて歌う。(譜例2)
- ・次に長二度上げてト長調で歌う。先ほどよりも優しい表現で歌う。—お姉さんがえる。(譜例3)
- ・その次は、お父さんがえる。短七度下げてイ長調で、ゆったりと歌う。(譜例4)

## かえるの合唱

岡本敏明作詞  
ドイツ曲

♩=152

かえるのうたがきこえてくるよ

譜例 2

クワ クワ クワ クワ ケケケケケケケケ (ケロケロケロケロ) クワ クワ クワ

譜例 3

かえるのうたがきこえてくるよ



譜例 4

譜例 5

・最後に、赤ちゃんがえる。お父さんがえるの1オクターブ高いイ長調で、弱く音の高さを十分感じて歌えるよう指導する。(譜例5)

へ調、ト調で無理のない自然な声で歌えるようにしてから、一旦低い調に下がってゆったりと歌い、その喉の感覚のままで高音域を歌うと比較的楽に歌え、楽しく頭声を覚えることが出来、音域も広がるのである。(譜例6)

譜例 6

東(1984)は、「一般に幼児の歌声の音域は非常に狭いと考えられているが、実際に指導してみると、幼児は高音域が出ないのではなく、出す方法を知らない場合が多い。」<sup>12)</sup>と述べている。

永野(2007)は、どならない歌い方を定着させるため歌唱教材を移調して歌うことを発声練習とする<sup>13)</sup>と述べているように、移調唱を推奨している

研究も多く見られる。

志民・中村(2010)は、その研究の目的として、「日常の生活や遊びの中で見られる子どもの音声表現には、非常に高度な声のコントロール機能が駆使されている。そのような声の技能が発動されるしゅみを、歌唱する際の技能へ応用する」<sup>14)</sup>とし、そのための歌唱教材を開発提唱している。幼児の普段の生活や遊びの様子を見ている、たとえば鬼ごっこで追いかけている時の叫び声や動物の鳴き声の模倣など、幼児は裏声を出せるのであり、歌唱の中でその声を使うことを導いてやれば声域は広がっていくと考えられるのである。

そして、本学幼稚園、音楽教室では発声指導に加え次のような音感教育も行っている。

ハ長調の主要三和音および副三和音を使って、  
・ピアノで提示される和音を聴いて分散して歌う「分散和音唱」。(譜例7)

譜例 7

譜例 8

・和音をピアノで弾き、上の音、下の音など単音のみ取り出して歌う「単音抽出唱」。(譜例8)

・和音を弾いてその構成音を答える「和音判別」。(譜例9)

譜例 9

このようなことに加え、音名を理解するために「ドミソのうた」<sup>15)</sup>(譜例10)を歌う。

譜例 10 ドミソ(CEG)の歌 作詞・作曲：談路和子

さらに進むと「ミソドのうた」<sup>16)</sup>(譜例11)を歌う。

譜例 11 ミソド(EGC)の 作詞・作曲：談路和子

このような指導を繰り返し行くと、幼児はドレミファソラシの各音を次第に理解していく。そして、これらを巧みに組み合わせ、単調にならないように変化をつけて根気よく続けることで、幼児の耳にはかなりはっきりとした音感となって定着する。

前述の発声指導と歌唱指導、音感教育を続けていくと、幼児は声や音高の問題を克服し、歌声を通して正しく音楽を表現する楽しさを覚えるようになる。そして、カノン（輪唱）、部分二部合唱へと幼児の歌の世界が広がっていくのである。

おわりに

理想の歌声について語るとき、それは一般的には音楽のジャンルや個人的な好みに大きく左右されるのだが、幼児の歌声に関しては、これまで述べてきたような“大きい声の弊害”が起これない歌声を目指すべきである。

それは、幼児の声帯に無理なく、高い声も低い声も、強い声も弱い声も自由に出せる柔らかく表現力のある声。一言でいえば機能性の高い声だといえる。ただし、そういう声を獲得するのは簡単なことではない。ロックミュージックに見られるように、人はより“大きい声”、より“大きい音”に魅力を感じる一面を持っている。だが、あえて弱く細い声から始め、子どもたちの“大きく”歌いたくなる衝動や、指導者自身の“大きく”歌わせたくなる気持ちを抑え、理想とする声についてのイメージをしっかりと持って指導しなければならないからである。

本学の取り組みは、音楽大学を卒業した演奏の専門家である本学の教員が指導を続けてきた成果であり、ある意味それが出来て当然なのかもしれない。しかし、保育者も“良い声”“良い歌”のイメージを高め、保育者自身がより“良い声”で、より“良い歌”を子どもたちに聞かせることで、子どもたちの歌声は必ず変わってくると信じている。なぜなら、保育園、幼稚園、法人や連盟、市の主催する保育・幼児教育の職員研修会に指導スタッフとして参加することが多々あるのだが、受講される職員・先生方の歌声は“綺麗”だからである。

そして、日本には、素晴らしい風景、季節感、四季折々の行事風物、動物や植物、お伽話や夢の

世界、あるいは家族やお友達との関わりなど、子ども達に夢を与え心躍らせる事柄をテーマとした素晴らしい童謡が沢山ある。それらの、先人達が残してくれた、あるいはこれからも生み出されるであろう“宝物”を、子ども達に大切に伝え、子ども達が少しでもその魅力を感じられるような歌唱指導をすることが、幼児と音楽で関わる者の大切な使命なのではないだろうか。

本稿の考察は、筆者の主観によるところがかなりある。今後は、保育・幼児教育現場での歌唱指導について、どのような指導をし、どのような悩みを持っているのか、より深く調査研究し考察を深めていく必要があると考える。

それから、本稿では幼児の歌唱指導における歌声について考察したが、日本語の歌を歌うにあたっては、詩の解釈の問題、発音の問題など、他にも難しい問題が沢山ある。今後は、そのような視点からも、幼児の歌唱について研究、考察してみたい。

#### 引用文献

- 1) 大蔵康義 (1998) 「人間の聴覚における音の中心点：音高・音量・音色・テンポについて」 日本大学芸術学部紀要 28 p35
- 2) 小木曾敏子 (1986) 「幼児の歌う活動についての一考察：どなって歌うことを中心に」 長野県短期大学紀要 41 p59
- 3) 颯田琴次 (1976) 『かたい声、やわらかい声』 日本放送出版協会 p131
- 4) 大森由美子 (2011) 「子どもの歌唱表現に関する一考察—幼稚園における歌唱指導を通して—」 東海学院大学短期大学部紀要 37 p41
- 5) 志民一成・中村かおり (2010) 「幼児の声の技能を引き出す歌唱教材の開発 裏声の技能に着目して」 静岡大学教育学部研究報告 (教科教育学篇) 41 p193
- 6) 奥田順也 (2014) 「小学校低学年の歌唱指導における『どなり声』の解消法に関する考察—実践事例に見られる傾向について—」 玉川大学芸術学部研究紀要 2014 p12
- 7) 文部科学省 (2017) 幼稚園教育要領 第2章ねらい及び内容 表現
- 8) 大森由美子 (2011) 「前掲稿」 p41
- 9) 東 保著 岸井勇雄・大久保稔編 (1984) 『音楽 (音楽リズム)』 第7講 p108
- 10) 品川三郎 (1958) 『児童発声』 音楽之友社 p63
- 11) 武田道子 (2002) 「幼児の歌声分析」 静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇 33 p261
- 12) 東 保著 岸井勇雄・大久保稔編 (1984) 『前掲書』

pp108-110

- 13) 永野恵理香 (2007) 「どうする？発声指導」『教育音楽』 1964年4月号 音楽之友社 p29
- 14) 志民一成・中村かおり (2010) 「前掲稿」 p193
- 15) 淡路和子 (2015) 『音楽ファンタジー —淡路和子作品集—』 大阪アーティスト協会 p196
- 16) 同上 p197

#### 参考文献

- F.Husler & Y.Rodd-Marling 須永義雄・大熊文子訳 (1987) 『うたうこと』 音楽之友社
- 東 保著 岸井勇雄・大久保稔編 (1984) 『音楽 (音楽リズム)』 第7講 チャイルド本社
- 同上 第8講
- 小木曾敏子 (1986) 「幼児の歌う活動についての一考察：どなって歌うことを中心に」 長野県短期大学紀要 41 pp57-66
- 加藤明代 (2014) 「保育における歌唱表現を考える (2)～歌唱活動における問題、その改善を目指して～」 常葉大学短期大学部紀要 45 pp151-158
- 武田道子 (1980) 「幼児の歌唱指導：導入時におけるつまずきとその治療」 静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇 11 pp119-130
- 鳥居美智子著 岸井勇雄・大久保稔編 (1984) 『音楽 (音楽リズム)』 第3講
- 淡路和子 (2015) 『音楽ファンタジー —淡路和子作品集—』 大阪アーティスト協会

— 2017.10.30 受稿、2017.10.30 受理 —





